

ハルビン西本願寺を振り返りつつ

石川県 押野 佐和子

私は、大正六（一九一七）年十月四日に福井県の鯖江市にあった寺の娘として生まれ、以来、鯖江市で青春を過ごしていましたが、二十四歳になった昭和十六年の春、縁あって石川県小松市出身で、当時満州国ハルビンの西本願寺の輪番をしていた押野慶浄の長男、押野慶祥に嫁ぎハルビンに渡りました。

押野家は、明治四十五年に、義父慶浄が小松市よりハルビンに移住し、大谷光端師より指名されてハルビン西本願寺の寺務を一任されておりました。布教はもとより、付属する幼稚園、高等女学校、花嫁学校なども経営し、義務教育以外の教育に心血を注いでおり、満州における婦女子の教育の第一人者の一人でした。

若かった私は、嫁入りとはいえ、生まれて初めて親元から一人離れてこの遠い満州にきて、しばらくは

ホームシックにかかり、広大な平野に行み見渡す限りの地平線に赤く大きな夕日が沈んでいく姿を眺めながら、故郷の鯖江や家族を恋しく思う日々を過ごしておりました。

しかし私には、在ハルビンの日本人子女の方々はもちろん、満人の良家の子女に、洋裁や和裁、それに手芸などの日本の教育を教えるという使命がありましたので、涙に明け暮れている時間はありませんでした。

毎日を生きがいをもって、充実した生活を過ごしておりました。

昭和十八年、十九年と続いて二人の男の子に恵まれました。今、振り返ってみると、そのころが一番幸せな時代だったと思っています。

落ち着いた生活も、そんなには長く続きませんでした。昭和十八年ごろになると、戦争の状況も少しずつ怪しい雲行きになり、新聞やラジオで知らされるニュースは悲観的なことばかりで、これからの先行きどうなることかと心配をするようになってきました。

銃後の守りは私たちが受け持つ、ということから動

労働員のかかった女学校の生徒と共に、私も乳飲み子を背負って軍の仕事に従事し、兵隊さんの着衣の洗濯、繕い物、炊事の手伝いなどで、学校で本来の教育をするよりは動員先に行く方が多いような毎日となりました。

戦争がだんだんと混乱状態となるに従って、日常接する白系ロシア人や満人の態度が次第におかしくなり、今まで協力的だった関係にも何となくひびが入ってきたようで、その様子には不気味な感じさえしてきました。

こんな状態になっていたときに、一番心配していた主人への召集がかかり、兵役につきました。これは我が家だけのことでなく、全満州の日本人男子すべてのことで、毎日毎日、次から次へと召集されて入隊していきました。

どこの家庭でも、残された者の心配と不安は計り知れないものがありました。しかし、ただ悩んでいるばかりもいかずに、私たち残された者は、さらに一層力を合わせて、勝つまではという気持ちをもって勤労奉

仕に全力を注ぐ日々を過ごすことにしていました。

昭和二十年八月九日未明から十日の早朝にかけて、ハルビンもソ連軍による空襲を受けて大型爆弾が落とされ、市街はあちこちで大爆発音に包まれて大変な騒ぎとなりました。そのときの不安と恐怖は、今でもはっきりと思い出されます。

そのころになると、ハルビン市街にもいろいろなうわさが流れていて、既に敗戦の色が濃くなり、ポダンコウ牡丹江、トウナイ東寧、チチハル齊齊哈爾などからは、軍人・軍属の家族たちが次々とハルビンを目指してなだれ込んできました。

それらの人々のうち大部分の人はハルビン西本願寺を頼ってききましたので、致し方なくここに收容しました。さしも広い寺院も、一夜にして避難民收容所と変わってしまい、本堂をはじめ附属の教育施設はすべて開放してみんなを受け入れました。

たちまちのうちに千人以上の人が入ってきましたが、そのときはまだ終戦という状態ではなく、いずれそのうちに関東軍が態勢を立て直してソ連軍を追い払

うのだから、一時的に避難をするのだというぐらゐの
気持ちでいました。子供連れの人も多く、避難行と
言っても、当面必要な身の回りの物は持てるだけ持っ
て集まっていたので、その混乱ぶりは尋常一様ではあ
りませんでした。

そのうちに、体の弱い子供の中には、環境の悪化と
十分に栄養のある食事をとれなくなったことから病氣
になり、一人、また一人と死んでいきました。これら
のことは、これから来るであろう運命を暗示してい
るようでした。

これだけ多くの人たちの、毎日の食べることの世話
をするということは大変なことで、満足のいく物を食
べさせることは至難の業でした。そこで、それぞれの
人に、ハルビンの市街に出て自分で食べることに働く
場所を探すことをお願いしましたが、それでも追いつ
きません。多くの人たちの食事をどのようにして準備
していたのか、今になるとよく思い出せません。しか
し、ハルビン在住の日本人会の人々が、ハルビン外か
ら避難してきた人たちのために、食事の世話や病人の

世話を一週間ぐらゐでしたが、一生懸命にしていたこ
とがありました。

昭和二十年八月十五日とうとう日本人みんなが、天
に見放されたと思つた運命の日がきました。正午、天
皇陛下のお言葉があり、無条件降伏を告げられまし
た。「日本人なら一人残らず生きた心地なし」と、そ
の瞬間より満人、ロシア人の暴動が始まり、何をす
るすべもなく、私たちの目の前で、財産も何もかも取ら
れてゆく事態が起りました。十五日を過ぎるころか
ら、満州全域の奥地から開拓団の人たちがここハルビ
ンまで避難してきて、本願寺にたどりつきました。避
難してくる集団の中には、年寄りや小さい子供はほと
んどと言つていくらい姿が見えませんでした。

年寄りが、足手まといになることをおそれて、「自
分たちを置いて、逃げていってくれ！」と言つて、そ
の場から動かなかつたので、致し方なくお互いに泣い
て別れてきたと、その様子を涙ながらに語る人。子供
が泣いていると、馬賊が鎌や棒を持って襲ってくるの
で、かわいい我が子の首を自らの手でしめ殺してきた

と、嗚咽しながら話す若い母親。子供のいない満人から子供が欲しいと頼まれて、これから先の苦難の道をとるか、または人の情にすがるか、どっちの道がこの子のためによいかと考え、涙をのんで置いてきたと、うつろな表情で言う人。それぞれの人生の罪と苦しみを背負ってここまで逃れてきた人々であふれていました。

北満で開拓に従事していた人々は、本当に悲惨な有様でした。マアタイ（大きな麻袋）の底の方に穴をあけてそれをかぶっているだけの女の人や、兵隊に行っている敗戦となり、家族のところには戻れずに、そのままの身着のまままでハルビンにたどり着いた男性等、さまざまな苦難を経てきた人々でした。

考えようによっては、命があつてハルビンまでたどり着いた人は、まだまだこの時点では幸のある方だと心から思いました。本願寺内は多くの人々の涙、涙であふれていました。

人間にはどんな極限の状態にあるときにおいても、「食べる」という本能は捨て去ることはできませんが、

本願寺においても同じことです。本願寺に収容されている人々も、食べ物や着る物はまず自分たちで求めなければなりません。そのためにはここを生活の拠点として、難行・苦行が始まりました。

このような生活が続いてくると、病人が始めて日に日にその数が増えてきましたので、本堂に収容されていた人たちにどいてもらって、そこを病室として病人を入れることにしましたが、たちまちのうちに広い本堂の病室も病人であふれるようになりました。

病人が増えるに従って亡くなる人もだんだんと多くなり、学校の運動場の全面に穴を掘り、そこに埋めて弔いましたが、そのうちに毎日の行事のようになってしまいました。

寒い冬の間は、まだそれでもよかったです。春から夏とだんだんと気温が高くなってくると、遺体が腐乱しはじめて悪臭を出すので大変なことになるので、再び掘り起こして馬車に乗せて、ハルビン郊外の広場に運びそこで茶毘に付しました。

そんなこんな苦しい日常を過ごしているうちに、

さらに伝染病が流行してきました。

予防処置や治療ができないうちに、ハルビン市内でもどんと流行してしまいました。本願寺内にも患者が続発しました。

ハルビン医大の学生さんが、夜、昼となく献身的に看護にあたっていました。何せ治療薬もありませんでしたので、病の進むまましかなく、ただ、看病をしているだけでした。

そんなときに、我が家でもとうとう義父の慶浄が亡くなり、それから間をおかずに次男も亡くしてしまいました。悲しみでしばらくは何も手がつかずに過ごしていましたが、自分だけではなく多くの人たちが同じような悲しみに打ちひしがれているのだと、気を取り直して避難者の世話に没頭することにしました。

伝染病は主としてチフスでしたが、少しも衰える兆しはなく、病人は次々と増えていきました。私もとうとうチフスにかかってしまいました。いろいろな病気の人たちと接していたので、いつかは私も病気になるだろうとは思いますが看病や食事の世話などに明け暮れ

ていましたので、それほど驚きはしませんでした。それでもなぜかしらがつかりとした気持ちになってしまいました。

チフスなどの伝染病は、後にかかる人ほどその菌は強くなっていて、反対にかかった人の体力は低下している。抵抗力が弱く、病気は重くなると言われていました。私もそのことを一番心配していましたが、とうとう現実のことになってしまったのです。

何日も意識がなく、それこそ生死の境をさまよっていたようですが、先に病気にかかり私が看病した人たちが、今度は私を看護してくれました。その方々の手厚い看病のおかげさまで、なんとか死ぬこともなく助かることができました。

ソ連兵の乱暴・狼藉は相変わらずで、「女を出せ！女を出せ！」と、勝ち誇った気分でハルビン市街を横行していましたが、本願寺にも毎日のようにやってきました。

そんなある日、今日もきて暴れ回っているソ連兵の前に美しい某軍人さんの奥さんが進み出て、「私が相

手をしますので、ほかの人は許してあげてください」と、はっきりとした声で言いました。

みんなはびっくりして何も言ひ出す言葉もなく、ただ黙って奥さんとソ連兵とを見つめるばかりでした。

その奥さんの態度は毅然としておりました。我が身を捨てて多くの女性を守った方のことは、いつまでも忘れることはできずに目に焼きついており、ただただ感動するのみでした。あの恐ろしかった光景は、今になって思い出しても心が痛みます。命を助けていたただいたご恩のほどは、あだおろそかにはできないことです。

また、こんなこともありました。

西本願寺の裏手に、お金持ちで、人品いやしからぬ満人の老夫婦が住んでおられました。戦前からハルビンに居住する日本人ともよい交際をしておられました。その老夫婦が、戦争に敗れて帰国のめども立っていないという状態の私たち日本人の姿を見て、「私たちには子供がいないので、是非、日本人の子供を一人もらいたい」と、申し出てきました。よく知っている

優しい老夫婦だったので、何とかして希望をかなえてあげようと思い、いろいろと奔走しましたが、男の子をもらえることとなりました。その老夫婦は心からの喜びを表して、「大事に育てます」と約束をして連れて帰りました。

次の日、何となく気掛かりになったので、老夫婦の家を訪ねて子供の様子を見ようと思っ行って行きましたところ、何たることか、三人は既に殺害されておりました。この驚きは言葉になりませんでした。私の引揚げ体験の中で、何と言っても悲劇の最たるものでしたし、悲惨の極みでした。人種を問わず人間の汚い欲望、そして裏切り、弱さ、理由なく罪もない人を簡単に殺す、殺されるなど、戦争というものは人間を大きく変えてしまいます。これが、「戦争は人と人との化かし合い」ともいわれるゆえんなのでしょうか。この事件は、ほんとうにショックでした。

北満の辺地から、日本の敗戦もまだ知らずに避難してきた開拓団の人たち、身も心もぼろぼろになって息も絶え絶えの有様で、やっとハルビンにたどり着いた

人々、いままで知っていた日本人とは思われないような姿でここまでできた人たちが続々とハルビンに集まってきました。

それに対しますます横暴の限りをつくしている満人やロシア人。勝者、敗者の立場をこれほどまでに露骨に示していることはありませんでした。

我が家でもいろいろなことが起きました。大勢の人たちが見ている前で、ロシア人がきて、私の胸にピストルを突き付けたままで、家にあるめぼしい品々や、彼らの欲しい物を全部、しかも堂々と持っていきましました。学校からは、生徒の使っている大事なグラランド・ピアノやオルガンなどを、自動車に積んで持ち出しました。ただ、声も出せずに黙って、なすがままに見ているより仕方がなく、ほかに方法はありませんでした。この悔しさは筆舌に尽くせるものではありません。この悔しさがどんなものであるかは、当事者でないと分からないと思います。

彼らの、にこにこ嬉しそうに笑っている顔は臉に焼き付いていて、今でもはつきりと思ひ出せます。

ハルビンでは十月になると寒気が急に厳しくなり、洗濯物など洗うあとからピンピンに凍ってしまします。

石炭は命と同じぐらいの価値をもち、ご飯は一食、二食抜かしても、石炭が無ければすぐに凍え死んでしまうので、冬での一番の必需品でした。地下室に貯蔵していた石炭はどんどんと減ってしまっているので、石炭にばかり頼れず、学校の机や椅子など燃えるものはみんな燃料として燃やして暖をとる暮らしになりました。

相変わらず流行している伝染病の病人は増加の傾向にあって、寒さが加わるに従って亡くなる人も多くなってきました。病人が「日本に帰るまでは、どんなにしても生きていたい」と、悲壮な言葉を残して死んでいくのを見ると、悲しくて一緒になって泣いたものです。

こんな悲惨な状況の中で新しい年を迎え、昭和二十一年になると、そろそろ、ハルビンでも引揚げの話が出始めました。私は、春になってからハルビンの日本人の最後のグループで帰ることに決まりました。

その後、一部残留を決めていた人や、病人で当分の間動くことのできない人たちも、半ば強制的に帰国させられることになりました。

身一つでもよいから故郷の実家に戻り、懐かしの両親と抱き合えると思うと、嬉しくて嬉しくてたまりませんでした。

まだ、体が本格的に回復しておらず、ふらふらしているのを見た周りの人たちは、「チフスを患った人は、あとはもう伝染病にはかからないそうよ」と言っていて、励ましてくれました。

五体満足で、夢にまで見ている故郷に帰れるということが現実のこととなったので、喜びが体中にみなぎり、体力もどんどん回復してくるようでした。

「ハルビンから最後に引き揚げた日本人の中に、死にそうな人が一人いた」なんて言われないようにと、体力の回復には随分と気を使って頑張りました。

完全に元どおりの状態にまで戻った、とは言えませんでした。一緒に帰国する人たちに迷惑をかけないで済むだろうと思う程度には治りました。私も周囲の

人々も、はっとしました。

昭和二十一年九月十日、待ち望んでいたハルビン出立の日がやってきました。

ハルビン駅では、ソ連兵によって持ち物の検査が行われ、徹底的に調べられました。その検査は厳しいもので、三歳の息子は、引き揚げ道中でのお菓子として、小さなリュックサックにいろいろ入れて大事に背負っていましたが、それをとられるのではないかと、思っ、絶対に放すまいと必死になって握りしめていて、しまいにはとうとう泣き出してしまいました。

ハルビンから出るときには、各人で持つことが許されていた物のうちお金は一人千円だけで、金や銀の貴金属・宝石類は、一切持って帰ることはできませんでした。それから文字が書かれたものは特に厳しく検査を受けました。写真でも裏に名前や場所などが書いてあると、文句なく全部、没収されてしまいました。

衣料は、夏物は二揃い、冬物は一揃いだけと決められていましたので、どれにしようか、どれを持って帰ろうかと随分と迷ったものでした。

違反をすると、一緒に帰る人たち全部に迷惑がかかり、足止めにされることになっていました。足止めということは、引揚者にとっては最も恐ろしい罰則でした。指示には正直に従わざるを得ませんでした。

ハルビン駅に着いて駅前で検査員の顔を見たときには、びっくりしました。私の教え子だったのです。運が良かったのか、悪かったのかはよく分かりませんが、でも今になって思えば運が良かったのだらうと思います。いろいろと親切にしてもらいました。

ハルビン駅での持ち物検査も無事に通過して、いよいよ待望の列車に乗れることとなり、本願寺の方に向かって別れを告げました。

本願寺は、満人の信者が数人であると引き受けられました。後、どのようになってしまうのか、尋ねるすべもなく歳月が過ぎ去ってしまいました。

私たち引揚者が乗せられた列車は、物を運ぶ無蓋の貨車でした。座ることなど到底できず、百人ぐらいが乗ればいっぱいになってしまうほどの貨車に、なんと

三百人ぐらいの人が詰め込まれたのですから、いったんその方向になったら右にも左にも向きを変えられないような状態でした。小さい子供は私の足元にしがみ付いていました。今、思い出しても息苦しくなり全身にじわっと脂汗が出てくるような気持ちになります。

小さい子供の中には、だんだんと体が衰弱して苦しいという言葉さえ出せなくなってしまい、そのうちに気を失って倒れる子供も出てきました。そんな状態の中で、列車は途中で幾度となく止まってはのろのろと動き出し、動いては、またすぐに止まってしまおうというのを繰り返しながら、奉天に向かっていました。

のろのろと動いている列車ですから、列車をねらって馬賊の集団が追いかけてきます。鎌や混紡を振りかざしながら列車に飛び移ろうとするので、私たちはみんなで力を出して大声でわめいて、相手を威嚇してどうにか難を逃れました。

やっと奉天駅に無事に着き、そこで全員降ろされました。

私は、まだ体が完全には回復していない状態で体力もなかったので、三歳の子供を抱いて乗ったり降りたりすることは無理でしたが、子供も母親の体のことをよく分かっていたのか、気丈夫に歩いてくれましたので、連れて帰ることができました。

奉天では、日本軍の官舎だった所に一時収容され、そこで二週間ばかり難民生活をしてやっと引揚船の入港するコロ島に向かうことができました。

ハルビンを出発し、途中、言葉では言い表すことのできない苦勞を続けながら、やっと最終の目的地コロ島に向かうこととなりました。だんだんと日本に近づいてくる喜びは例えようもなく、胸がいっぱいになってきました。

コロ島の終着駅で列車から全員降ろされました。港で、引揚船の日の丸の旗がはためいているのを見たときには、ほとんどの人が思わず大声を出して感涙にむせびました。このときの感激も忘れられない思い出の一つです。

コロ島に着いても、引揚船に乗船するには順番が

あったので、すぐには乗船できません。また、約二週間ばかり馬小屋で暮らしました。馬一頭分の小屋に十人ずつが押し込まれました。でも、もうすぐ日本に帰れると思うと、あまり苦になりませんでした。昼間は青空の下で過ごし、夜は馬小屋の土の上で寝ました。子供や体の衰弱しているような人は、地面から直接に伝わってくる冷え込みに体全体が冷えきってしまい、腹痛などを起こす人が大勢いました。「トイト」と呼ばれる細長い、深さ一メートルぐらいの溝を掘った急造の便所には血便があふれていました。

日本にはもうすぐ帰ることができるのだと思うと、嬉しきで少しぐらいの苦勞は苦勞になりませんでした。た。

やっと乗船の順番がきました。その日はあいにくの大雨で、着ている物はびしょ濡れとなり足はどろどろになりましたが、それでも引揚船に乗れる喜びの方がずっと大きく、濡れることなどは気にもなりません。した。

私の乗った引揚船は、日本船の小さいものでした。

アメリカの大きく立派な船に乗って帰れる幸運な人たちもおりましたが、こんな小さい船でもこれに乗りさえすれば、待ちわびていた日本に帰れるのだと思うと、ぜいたくな思いはすぐに忘れられました。

翌日の早朝、甲板に出了ました。船は青い海原をゆっくりと進んでいました。日本へ日本へと、エンジンの音も、波風の音も、海鳥の鳴き声も、何もかも日本へ日本へと言っているように聞こえていました。

それでももう安心だ、次は博多港に着くのみと、心身共にほっとした気持ちになっていたところ、急に避難命令が出て全員が甲板に集められました。船倉から火が出たということでした。びっくりして私は、子供を背負い飛び込むための準備をしました。飛び込めと言われるのを待ちながら、「ここで命の終わりか、今まで苦勞に苦勞を重ねてきてやっとこの船に乗ることができて、これで日本に帰れると喜んだのもつかの間で喜びか。残念、無念」と思い、覚悟を決めました。

そのうちに火は消えたようでした。どの程度の火事であったのか知らされませんでした。が、何日か海の上

で停泊しました。真っ暗やみの夜の船上生活は不気味でした。

それから十日ぐらいたったころだと思えますが、日本の陸地が見えました。喜びの歓声が船内に満ちあふれました。

博多港ではDDTを頭からまかれ、虫くいひのひどい乾パンを一袋ずつ渡されました。

一歩一歩と踏みしめる日本の土の感触は、日本に帰ったという確かな手ごたえです。この有り難さは何にも例えようがありませんでした。

一路、ふるさと鯖江の両親の元に向かって走っている汽車の中でのことは、全然記憶に残っていません。喜びの感情はありながら中味は消えてしまったようです。

鯖江の駅に着いたのは、月の明るい夜でした。父は、一里の夜道を提灯を持って駅に出て待っていてくれました。父は私の顔を見るなり、「命をいただき、よくも無事に帰ってきてくれた」と言ってくれました。その喜びの声は、今までの苦しみを和らげ、深く

深く心にしみました。

家路には、父が子供を背負って向かいました。何か話してよいのか分からずに、ただ涙が出るばかりでした。

父は子供を背にして、兄はどうやらビルマ方面で戦死をしたようだ。兄嫁は子供を三人残して病気で死んだ。しかしその子たちは三人とも元気にしている。母さんはきつと門前で待っているだろうと、断片的に話をしてくれました。

ふるさとの鯖江で、両親の温かいひごの下で二人とも元氣を取り戻しました。

昭和二十二年の春に、夫がシベリアから復員し小松市の家に無事に戻ったとの知らせがあったので、すぐに子供を連れて小松市の押野の家に帰りました。

あれから五十数年がたちました。ピストルを胸に突き付けられた恐怖。チフスにかかり死と紙一重の重病となったが周りの人々の手厚い看病での命拾い、大荒野・大草原での避難行、引揚船の火事騒ぎ、博多に向かうときの大海原、さまざまな人間模様などが、次か

ら次へと浮かんで消え、消えては浮かんできます。

引き揚げて落ち着いたとはいふものの、生活のために、何日も寝ずに洋裁をしたことなどいろいろな苦勞もありました。

私は、毎日み仏のお教えは忘れておりません。しかし八十歳の坂を越えますと、一つ一つ体が壊れていくようになりました。長い間させていただきました老人会のお世話も、思うようにできなくなりました。が、生かされているというすばらしさを強く感じて、微力ですが今後何かお世話をさせていただきたいと思っています。また、俳句の会も楽しみ、かつ学んでいきたいと考えています。

振り返ると、本当に長いようで短い日々を送りました。まぶたを閉じるとハルビンの風景が浮んできます。義父慶浄が築きあげたハルビン西本願寺の全ぼうが、その風景の中にすっぽりと入ったとき、一滴の涙がこぼれ落ちました。